## 〔B 年〕聖霊降臨節第８主日(2023 年 7 月 16 日)

### 【旧約聖書日課】サムエル記上　24章8～18節

8ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲う
ことを許さなかった。サウルは洞窟を出て先に進
んだ。9ダビデも続いて洞窟を出ると、サウルの背
後から声をかけた。「わが主君、王よ。」サウル
が振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、礼をして、
10サウルに言った。「ダビデがあなたに危害を加え
ようとしている、などといううわさになぜ耳を貸
されるのですか。11今日、主が洞窟であなたをわた
しの手に渡されたのを、あなた御自身の目で御覧
になりました。そのとき、あなたを殺せと言う者
もいましたが、あなたをかばって、『わたしの主
人に手をかけることはしない。主が油を注がれた
方だ』と言い聞かせました。12わが父よ、よく御覧
ください。あなたの上着の端がわたしの手にあり
ます。わたしは上着の端を切り取りながらも、あ
なたを殺すことはしませんでした。御覧ください。
わたしの手には悪事も反逆もありません。あなた
に対して罪を犯しませんでした。それにもかかわ
らず、あなたはわたしの命を奪おうと追い回され
るのです。13主があなたとわたしの間を裁き、わた
しのために主があなたに報復されますように。わ
たしは手を下しはしません。14古いことわざに、
『悪は悪人から出る』と言います。わたしは手を
下しません。15イスラエルの王は、誰を追って出て
来られたのでしょう。あなたは誰を追跡されるの
ですか。死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか。
16主が裁き手となって、わたしとあなたの間を裁
き、わたしの訴えを弁護し、あなたの手からわた
しを救ってくださいますように。」
17ダビデがサウルに対するこれらの言葉を言い
終えると、サウルは言った。「わが子ダビデよ、
これはお前の声か。」サウルは声をあげて泣き、
18ダビデに言った。「お前はわたしより正しい。お
前はわたしに善意をもって対し、わたしはお前に
悪意をもって対した。

### 【使徒書日課】
### ガラテヤの信徒への手紙　6章1～10節

1兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に
陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたが
たは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰
らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、
自分に気をつけなさい。2互いに重荷を担いなさい。
そのようにしてこそ、キリストの律法を全うする
ことになるのです。3実際には何者でもないのに、
自分をひとかどの者だと思う人がいるなら、その
人は自分自身を欺いています。4各自で、自分の行
いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対し
てだけは誇れるとしても、他人に対しては誇るこ
とができないでしょう。5めいめいが、自分の重荷
を担うべきです。6御言葉を教えてもらう人は、教
えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。
7思い違いをしてはいけません。神は、人から侮ら
れることはありません。人は、自分の蒔いたもの
を、また刈り取ることになるのです。8自分の肉に
蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、
霊から永遠の命を刈り取ります。9たゆまず善を行
いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、
実を刈り取ることになります。10ですから、今、時
のある間に、すべての人に対して、特に信仰によ
って家族になった人々に対して、善を行いましょ
う。

### 【福音書日課】ルカによる福音書　7章36～50節

36さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事を
してほしいと願ったので、イエスはその家に入っ
て食事の席に着かれた。37この町に一人の罪深い
女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入っ
て食事の席に着いておられるのを知り、香油の入
った石膏の壺を持って来て、38後ろからイエスの
足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし
始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻
して香油を塗った。39イエスを招待したファリサ
イ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者な
ら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分
かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。40そこで、
イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに
言いたいことがある」と言われると、シモンは、
「先生、おっしゃってください」と言った。41イエ
スはお話しになった。「ある金貸しから、二人の
人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、も
う一人は五十デナリオンである。42二人には返す
金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消し
にしてやった。二人のうち、どちらが多くその金
貸しを愛するだろうか。」43シモンは、「帳消し
にしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。
イエスは、「そのとおりだ」と言われた。44そして、
女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この
人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、
あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は
涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれ
た。45あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかった
が、この人はわたしが入って来てから、わたしの
足に接吻してやまなかった。46あなたは頭にオリ
ーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香
油を塗ってくれた。47だから、言っておく。この人
が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛
の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、
愛することも少ない。」48そして、イエスは女に、
「あなたの罪は赦された」と言われた。49同席の人
たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だ
ろう」と考え始めた。50イエスは女に、「あなたの
信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と
言われた。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## サムエル記上　24章8～18節

8ダビデはこう言って部下をたしなめ、サウルを
襲うことを許さなかった。サウルは洞穴を出て、
道を進んだ。9その後で、ダビデも身を起こし、洞
穴を出て、サウルの背後から「王様」と声をかけ
た。サウルが振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、
礼をした。10そしてサウルに言った。「なぜあなた
は、ダビデがあなたに危害を加えようとしている、
などという人の噂に耳を貸されるのですか。11今
日、主が洞穴であなたを私の手に渡されたのを、
ご自分の目で御覧になっています。あなたを殺せ
と言う者もいましたが、あなたをかばって、『私
は自分の主君に手をかけることはしない。彼は主
が油を注がれた方なのだ』と言い聞かせました。
12わが父よ、よく御覧ください。あなたの上着の端
が私の手にあります。私は上着の端を切り取りな
がらも、あなたを殺そうとはしませんでした。ど
うか分かってください。私には悪意も、背く意志
もありません。あなたに対して罪を犯しておりま
せん。それなのに、あなたは私の命を奪おうと付
け狙うのです。13主が私とあなたの間を裁き、私の
ためにあなたに報復されるでしょう。私は自分で
は手を下しません。14古いことわざに、『悪は悪人
から出る』と言います。私は手を下しません。15イ
スラエルの王は、誰を追って来られたのでしょう
か。あなたは誰を追跡されているのでしょうか。
死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか。16主が裁き
手となって、私とあなたの間を裁いてくださいま
すように。主がご覧になって、私の訴えを弁護し、
あなたの手から私を救ってくださいますように。」
17ダビデがサウルにこれらの言葉を語り終えると、
サウルは言った。「わが子ダビデよ、これは
お前の声か。」サウルは声をあげて泣いた。18そし
てダビデに言った。「お前は私より正しい。お前
は私に善意を示してくれたのに、私はお前に悪意
を抱いてきた。

## ガラテヤの信徒への手紙　6章1～10節

1きょうだいたち、もし誰かが過ちに陥ったなら、
霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を
正しなさい。あなた自身も誘惑されないように、
自分に気をつけなさい。2互いに重荷を担いなさい。
そうすれば、キリストの律法を全うすることにな
ります。3何者でもないのに、自分を何者かである
と思う人がいるなら、その人は自らを欺いている
のです。4おのおの自分の行いを吟味しなさい。そ
うすれば、自分だけには誇れるとしても、他人に
は誇れなくなるでしょう。5おのおのが自分の荷を
負うことになるのです。6御言葉を教えてもらう人
は、教えてくれる人と良いものをすべて分かち合
いなさい。
7思い違いをしてはなりません。神は侮られるよ
うな方ではありません。人は、自分の蒔いたもの
を、また刈り取ることになるのです。8自分の肉に
蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、
霊から永遠の命を刈り取ります。9たゆまず善を行
いましょう。倦むことなく励んでいれば、時が来
て、刈り取ることになります。10それゆえ、機会の
ある度に、すべての人に対して、特に信仰によっ
て家族になった人々に対して、善を行いましょう。

## ルカによる福音書　7章36～50節

36さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事を
したいと願ったので、イエスはその家に入って食
事の席に着かれた。37この町に一人の罪深い女がい
た。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事
の席に着いておられるのを知り、香油の入った
石膏の壺を持って来て、38背後に立ち、イエスの足
元で泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の
髪の毛で拭い、その足に接吻して香油を塗った。
39イエスを招いたファリサイ派の人はこれを見て、
「この人がもし預言者なら、自分に触れている女
が誰で、どんな素性の者か分かるはずだ。罪深い
女なのに」と思った。40そこで、イエスがその人に
向かって、「シモン、あなたに言いたいことがあ
る」と言われた。シモンは、「先生、おっしゃっ
てください」と言った。41「ある金貸しから、二人
の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、
もう一人は五十デナリオンである。42ところが、返
すことができなかったので、金貸しは二人の借金
を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多
くその金貸しを愛するだろうか。」43シモンは、「帳
消しにしてもらった額の多い方だと思います」と
答えた。イエスは、「あなたの判断は正しい」と
言われた。44そして、女の方を振り向いて、シモン
に言われた。「この人を見ないか。私があなたの
家に入ったとき、あなたは足を洗う水をくれなか
ったが、この人は涙で私の足をぬらし、髪の毛で
拭ってくれた。45あなたは私に接吻してくれなか
ったが、この人は私が入ったときから、私の足に
接吻してやまなかった。46あなたは頭に油を塗っ
てくれなかったが、この人は足に香油を塗ってく
れた。47だから、言っておく。この人が多くの罪を
赦されたことは、私に示した愛の大きさで分かる。
赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」
48そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」
と言われた。49同席の人たちは、「罪まで赦すこの
人は、一体何者だろう」と考え始めた。50イエスは
女に言われた。「あなたの信仰があなたを救った。
安心して行きなさい。」

**黙想のためのノート**

## 次主日の教会暦と聖書日課

・7 月 16 日「聖霊降臨節第 8 主日」の日課主題は「キリストの心」。
・旧約聖書日課は、「サムエル記上」から、サウル王から追われたダビデが王を害する機会を敢えて見逃した逸話の箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、パウロが終わりの勧告に入って行く箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、罪深い女が主イエスに香油を注いだ逸話の箇所。

## 旧約日課（サムエル上 24 章より）

・「サムエル記」は、ユダヤ教正典（ヘブライ語聖書）の「前の預言者」の第三に置かれた歴史物語文書。ユダ・イスラエルの王国草創期の物語として、預言者サムエルを軸に、サウル王の時代からダビデ王の時代にかけて展開する。上巻はサウル王の時代、下巻はダビデ王の時代と区分できる。「サムエル記」は、「列王記」と共に、南王国ユダ＝ダビデ王家の王国伝承を土台として編纂されており、ダビデ王を理想化すると同時に、北王国イスラエルの枠組みの創始者であるサウル王に一定の評価を与え、ダビデがサウル王の正統な後継者たりうる者であるという視点で、両者の伝承物語が結合されていると考えられる。それによって、サウルの王国とダビデの王国が、あたかも一つの連続した王国であるかのように見せているが、「サムエル記」や「列王記」が実際に記述していることからは、別の史実が見えてくる。すなわち、「士師の時代」まで緩やかな隣人関係に過ぎなかった諸部族のうち、エフライム族などを中心とした北方部族が次第に協力関係を強めた結果、ベニヤミン族出身のサウルを王として立てた「イスラエル」という部族連合の枠組みが成立したのに対して、南部に位置したユダ族は独自の立ち位置を堅持しようとしたが、結局サウルの「イスラエル」王国に組み込まれ、属国として「イスラエルとユダ」の枠組みに帰属させられることになった。このとき属国ユダの盟主としてサウルに臨んだのがダビデの一族であり、形式上サウルの臣下と位置づけられながらも、同時に反乱予備分子として王から警戒される存在でもあったのがダビデらであった。実際、ダビデらは、サウルの王国が敵対したペリシテの軍隊に加担した者としても描かれる。その後、サウル王が王子ヨナタンと共に戦死すると、南「ユダ」族は機を見て属国から脱して独立しダビデを王とした。他方、北「イスラエル」部族連合は、サウル王家の王子イシュ・ポシェトに王位を継がせるが、彼には先代サウル王ほどのカリスマも実力も伴わなかったため、南「ユダ」族の独立を留めることもできず、結局、北「イスラエル」部族連合は、サウル王家の元での王国存続を断念し、南「ユダ」王国の王ダビデを自らの王国の王として戴く道を選び、ダビデ王のもとに「ユダ・イスラエル」連合王国が成立したのである。

・日課箇所は、サウル王の臣下の立場にあったダビデが王に命を狙われ、洞窟に隠れていたときの逸話として伝えられている。ダビデらが隠れていた洞窟に、彼を追ってきたサウル王が用を足しに入って来たとき、ダビデは王を害するチャンスであったが、そうしなかったと物語られる。ここで重要な点は、ダビデが部下に告げ、サウルにも告げた言葉として繰り返される、「わたしの主人に手をかけることはしない。主が油を注がれた方だ」（11 節。部下への言葉は 7 節）にある。「油を注がれた方」は、ヘブライ語「マーシーアー」すなわち「メシア」で、物語においては預言者サムエルがサウルとダビデのそれぞれに、王位に就くしるしとして「油注ぎ」を実施しており、その際に両人とも「聖霊が激しく降る」ことが起こったと描かれている（サム上 10:1 以下、同 16:13）。「油注ぎ」すなわち「メシア」への選びは、実際には「預言者」のような人の手によって為されながら、そこに「主なる神」の介在を信じることによって成立する営為であるゆえに尊重されるべきものであることを、この物語は示している。「人の手」と「神の介在」の両方であり、一方のみを必須条件とする「メシア」観は、旧約には見当たらない。

## 使徒書日課（ガラテヤ 6 章より）

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれた書簡文書。使徒パウロが、おそらくバルナバとの宣教旅行に際して形成したガラテヤ地方の諸教会に宛てて記した。パウロは、バルナバに伴った宣教旅行の後、再びバルナバ宣教団に加わることを拒み、独自の宣教団を組織して活動しようとした（使徒 15:36 以下）。その理由を、「使徒言行録」は、同行者の人選に関する意見の相違にあったと描くが、実際には、エルサレムの使徒たちの意向に沿って活動するバルナバと、独自の回心体験に基づいて思惟した神学的主張に基づいて徹底的な態度を求めるパウロとの間で、宣教方針を一致させることが困難になったのだろう。その不一致の原因となったパウロの態度が表れているのが、本書簡である。本書簡で、パウロは、「救いの共同体」としての教会に加わる上で、異邦人に対して「割礼」を不要とし、「律法」に基づくユダヤ人的生活規範の遵守という枠組みも解体されているという主張を徹底し、それらを異邦人信者に強いることはもちろん、示唆することさえ批判し、糾弾している。パウロにとって必要なことは、ユダヤ人も異邦人も、「キリストと結ばれる洗礼」を受けることだけである。歴史的には、これが普遍主義的キリスト教会の基準になったが、1 世紀当時の教会界隈では、まだ圧倒的にユダヤ人信者が多く、少なからず衝突を生じ、また誤解を招いた。ガラテヤの諸教会に対して、これらの主張を徹底してみせようとしたパウロも、コリントの教会やローマの教会に宛てた書簡では、大幅に譲歩し、各自の宗教習慣を原則的に認める、相互不干渉的な自由の原則を打ち出すようになっている。

・日課箇所では、「割礼」を徹底的に否定し、「律法」遵守を無意味なものであるかのように主張してきたパウロが、「キリストの律法」という視点で新しい信仰規範を示そうとしている。実のところ、パウロが「割礼」や「律法」を否定するのは、それが「ユダヤ人」という枠組みを規定するものとして働く場合である。つまり、パウロは、「キリスト」によって、「ユダヤ人と異邦人」というような二項対立的枠組みが解体されるところに、救いを見ている。そもそも、ユダヤ人パウロにとって、救いとは、「神の民＝イスラエル」という共同体の中に数えられることである。伝統的なユダヤ人は、「割礼」を受け、「律法」に基づく一定の生活習慣を遵守するところに成立する「ユダヤ人」が「神の民＝イスラエル」そのものであると考えてきた。しかし、それによって、たとえユダヤ人として生まれても、「割礼」を受けていない、あるいは「律法」に基づいた生活習慣を遵守できていない、というような者は、「罪人」とみなされ、「異邦人」と同等にみなされることが起こっていた。主イエスがそのような枠組みを解体し、事実上、「罪人」と呼ばれていた人々を共同体に回復したところに、パウロの救済理解の原点があったと考えられる。主イエスの実践を徹底すれば、おのずと「ユダヤ人と異邦人」という枠組みは解体される。これを「福音」と信じ、「キリストと結びつく洗礼」を受けた者は、出自や過去の経緯に関わらず、「神の国の民」として新しく生き始めるのである。

**福音書日課（ルカ７章より）**

・日課箇所は、「罪深い女の香油注ぎ」の逸話として知られ、厳密には「ルカ」だけが伝えているが、非常によく似た「香油注ぎ」の逸話を他の福音書が共通して「受難物語」の中で伝えている。「ルカ」は、「受難物語」の中で「香油注ぎ」の逸話を伝えていないので、おそらく、同じ逸話伝承を異なる解釈で伝え、物語っているのだろう。

・出来事の場面設定は、「あるファリサイ派の人の家での食事の席」となっている。彼の名は、断りなく「シモン」として描かれているが（40節以下）、「ルカ福音書」において「シモン」と呼ばれる人物は、日課箇所以外ではすべて「ペトロ」のことである。一方、「香油注ぎ」の逸話ということで比較すれば、「マタイ」と「マルコ」は、その人物を「重い皮膚病の人シモン」とし、「ヨハネ」は「ラザロ」としている。

・50 節「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい（平和のうちに出て行け）」は、長血の女に対して告げられた言葉と同じで（8:48）、また、重い皮膚病のサマリア人に告げられた言葉もほぼ同じ（17:19）。「ルカ」がこの逸話を、主イエス・キリスト理解を促す「受難物語」中ではなく、ここに置いた意図は、この一句から理解することができよう。

**来週の誕生日 （7 月 16 日～22 日）**

。

**主日礼拝の讃美歌から**

・21-2 番「聖なるみ神は」（＝Ⅰ18）は、17 世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家J. クリューガーが作曲した曲に合わせて、20 世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった 1931 年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。

・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」（＝Ⅲ5）は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともにうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚昊が曲を付した。

・21-513 番「主は命を」（＝Ⅰ332）は、19 世紀リバイバル運動の中で生まれた福音唱歌の代表作。作詞者ハヴィガルは、父が英国教会司祭で、多くの宗教詩を残した（21－512「主よ、献げます」など）

・21-541 番「また会うその日まで」（＝Ⅱ-23「かみともにいまして」）は、465 番（Ⅰ405）「神ともにいまして」と同じ原歌詞に、ヴォーン・ウィリアムズの曲が付けられた讃美歌で、原歌詞により再訳。英語原歌詞は 19 世紀米国会衆派牧師ランキンが伝道集会のために作詞。米国の野外伝道集会では閉会時に伝道者を見送る歌として多用され、現在でもメソジスト等で「閉会の歌」として讃美歌集に収められている。

*21-513「主は命を」＝Ⅰ332*

## *I Gave My Life for Thee*

1. I gave My life for thee, / My precious blood I shed, / That thou might'st ransomed be / And quickened from the dead. / I gave My life for thee; / What hast thou given for Me?
2. I spent long years for thee / In weariness and woe / That an eternity / Of joy thou mightest know. / I spent long years for thee; / Hast thou spent one for Me?
3. My Father's home of light, / My rainbow-circled throne, / I left for earthly night, / For wanderings sad and lone. / I left it all for thee; / Hast thou left aught for Me?
4. I suffered much for thee, / More than My tongue may tell, / Of bitterest agony, / To rescue thee from hell. / I suffered much for thee; / What canst thou bear for Me?
5. And I have brought to thee / Down from My home above / Salvation full and free, / My pardon and My love. / Great gifts I brought to thee; / What hast thou brought to Me?
6. Oh, let thy life be given, / Thy years for Me be spent, / World's fetters all be riven, / And joy with suffering blent! / I gave Myself for thee: / Give thou thyself to Me.

*21-541「また会うその日まで」*

## *God be with you till we meet again*

1. God be with you till we meet again; / by his counsels guide, uphold you, / with his sheep securely fold you; / God be with you till we meet again.

*Refrain:*
*Till we meet, till we meet, / till we meet at Jesus' feet; / till we meet, till we meet, / God be with you till we meet again.*

2. God be with you till we meet again; / neath his wings securely hide you, / daily manna still provide you; / God be with you till we meet again. / (Refrain)
3. God be with you till we meet again; / when life's perils thick confound you, / put his arms unfailing round you; / God be with you till we meet again. / (Refrain)
4. God be with you till we meet again; / keep love's banner floating o'er you, / smite death's threatening wave before you; / God be with you till we meet again. / (Refrain)